

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)
大学院学生研究
2016年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院異文化コミュニケーション 研究科異文化コミュニケーション 専攻		
研究代表者 (2017年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	異文化コミュニケーション研究科 異文化コミュニケーション専攻 博士課程前期課程2年	今泉 裕子	印
指導教員	所属・職名	氏名	
	異文化コミュニケーション研究科	奥野 克巳	印
自然・人文・社会の別	自然 ・ 人文 ・ 社会	個人・共同の別	個人 ・ 共同 名
研究課題	メキシコのトゥモロコシを中心とした食文化研究		
研究組織 (研究代表者・共同研究者) ※2017年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	異文化コミュニケーション研究科 異文化コミュニケーション専攻 博士課程前期課程2年	今泉 裕子	
研究期間	2016 年度		
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 199,453円 / (採択金額) 200,000円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

地方の郷土料理「チレス・エン・ノガダ」がどのようにメキシコの独立記念日の料理(国民料理)となっていたのか。本研究は、独立記念日の料理の形成過程を出版資本主義の観点から料理本を対象にして調査、分析し、社会的・政治的・経済的環境に関連づけながら、背後にある目的や意図を再発見することを目的としている。研究の結果、本料理を独立記念日の料理として食す行為が形成されたのは、2000年以降という近年のことであることがわかった。その背景は、食のグローバル化への反動、エスニック・リバイバル、「伝統への回帰」があると結論づけた。他方、本料理に対する人々の生の語りを分析すると、独立記念日というルールや体系などに縛られない多様で自由に食す姿が浮かあがり、自分たちの郷土料理や家庭料理を常に第一に考えていることがわかった。以上を通し、異文化を理解するためには、構築された秩序ある体系(ツリー)と、予想不能で多様な根茎状(リゾーム)の両面を浮かび上がらせる必要性を示唆した。

キーワード(研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[メキシコ] [国民料理] [料理本]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)**(1) 研究背景と目的**

食は風土や気候などの自然環境や、民族や宗教などの社会的環境に強く結びついていると言われるが、現在は、食文化を国単位で語ることが多い。

本研究で対象にしたメキシコ合衆国では、世界でも珍しい、独立記念日の料理が存在する。この「チレス・エン・ノガダ」と呼ばれる料理は、緑の唐辛子の中に挽肉や果物等の具材を詰め、白いクルミソースをかけ、赤いザクロの実と緑のイタリアンパセリを飾ったもので、その色合いはメキシコの国旗と同色である。

もともとプエブラ地方の郷土料理であった「チレス・エン・ノガダ」がどのように独立記念日の料理(国民料理)になっていったのかを論文の問いとし、その形成過程を社会的・政治的・経済的環境に関連付けながら明らかにすることによって、背後にある意味や意図を再発見することを本研究の目的としている。加えて、「チレス・エン・ノガダ」に対するメキシコの人々の生の語りも分析し、その実相にも迫ろうと試みている。

(2) 先行研究

筆者は先行研究として、フランスとイタリアの欧州 2 カ国とインドネシアとインドの多民族多言語の 2 カ国の国民料理の形成を取り上げている。この分析によって、上流階級から下層へと段階的な普及と簡素化の末に成立したフランス国民料理、国内地域間の料理の統合と平準化で導き出されたイタリア国民料理、そして、オリエンタリズムの内面化を通して形づくられたインドやインドネシアの国民料理というように、いくつかの形成過程のパターンが見られることを確認した。

続いて、メキシコの国民料理の形成過程を歴史的に検証した。メキシコ革命後に、自らの祖先の食であるトウモロコシを中心とした料理が受容され、国民料理となったことが確認された。それは、メキシコ人よって再発見された国民料理であり、先行研究で検証したパターンには当てはまらないことがわかった。

(3) 研究方法と分析

研究方法は、アンダーソン(2007)の出版資本主義の観点から、料理本を研究の対象とし、「チレス・エン・ノガダ」が「独立記念日の料理」として周知されていく過程を読みとくものである。

最初に、革命後の国民料理形成期(1940年代～1960年代)に多数の料理本を出版したホセフィーナ・ベラスケス・デ・レオンに焦点をあて調査した。しかしながら、国民料理形成期には、「チレス・エン・ノガダ」は、独立記念日の料理として成立していないことがわかった。

再度、1831年のメキシコ独立後初の料理本を皮切りに、調査を続け、「チレス・エン・ノガダ」が独立記念日の料理への形成されていく過程を探り出した。

その結果、料理本の記述から三つの重要な変化が確認できた。

一つ目は、「St. Agustin day (聖アグスティンの日)」から「Don Agustin de Iturbide's saint's day (アグスティン・デ・イトウルビデの日)」という記述が変化していることが確認できた。

二つ目は、「地方料理」から「全国区の料理」へのカテゴリーが徐々に変化していくことが確認できた。

そして三つ目は、「7、8月」から「8、9月」へ旬の時期が変化していること、「8月28日の聖アグスティンの日」から「9月16日の独立記念日」へと日付が変化していることが確認できた。

このような事実から、メキシコにおいて「チレス・エン・ノガダ」を独立記念日に食する行為は、2000年以降に構築されてきた習慣であることが明らかになった。

(4) 社会的、経済的、政治的要因

「チレス・エン・ノガダ」を独立記念日に食する行為が 2000 年代という比較的新しい時代に構築されたその主な要因は、1980 年代のメキシコの債務危機であると分析している。

1982 年にメキシコは対外債務返済猶予を申し出た。その後、債務危機を立て直すために、IMF (国際通貨基金) とアメリカを中心とした債務国の指示を受け、メキシコは厳しい緊縮財政政策、市場経済の自由化、国営・公営机上の民営化、外国資本への開放などを行った。それらの策により、現在のメキシコの経済体質は輸出の 8 割、輸入の 5 割をアメリカに依存する状態となっている。

農業分野、労働分野においても、アメリカのような大規模農業が繁栄し、中小農家が消滅している。安い外国製品やファーストフードなどの侵入し、食、食のスタイルも変化をしてくれている。また、コカ・コーラ摂取量世界一や肥満率が世界一という統計が物語るように肥満の問題や栄養不足なども深刻化している。

中小農家が成り立たない人々は職を求め、アメリカへ渡る者も多い。移民としてアメリカに渡った人々が持ち込む食習慣も、メキシコの従来の食文化に変化ともたらしている。

すなわち、食のグローバル化、特にアメリカ化が進んでいる状況で、グローバル化への反動による自国の伝統的食文化へ回帰、「エスニック・リバイバル (伝統への回帰)」が起こり、「チレス・エン・ノガダ」を独立記念日の料理として食す行為は成立していったのだと結論づけた。その目的は、ホブズボウム (1998) の指摘するように、国家としては国民の統合、資本主義社会としては営利行為であると考察した。

(5) 実相への調査

他方、インタビューや聞き取りを実行し、本料理に対するメキシコの人々の実相を調査した。

メキシコの人々の語りから浮かびあがった実態は、それほど直線的ではなかった。確かに、「チレス・エン・ノガダ」を食することによる国民としての意識の創出が感じられるものの、全体的には、独立記念日への一体感はなく、ルールや体系などに縛られず、多様な形で自由に食するという、矛盾をはらみつつ、均整している姿であった。

彼らの中では、家族や地域による料理の方がより親密性が高いことが見えてきた。

(6) 結論

「チレス・エン・ノガダ」は必ずしも絶対的な国民料理ではないのではないのか。

「チレス・エン・ノガダ」は、国民の統合という究極の意図をはらんだ「ツリー」状の動きの中に位置付けられる同時に、日常の暮らしにおいては、家族や土地の習慣に合わせながら、増幅されたり省略されたりする「リゾーム」的な動きの中に位置付けられる両面とを合わせ持つ料理であるのだ。

食の文化はそれぞれの時代を背景にして生み出され、常に変容していく。食を、さまざまな属性、身分・階級・性別・人種・民族・宗教など、を包摂する国 (ネーション) の文化として理解するためには、構築された秩序ある体系 (ツリー) の側面と、予想不能で多様な根茎状 (リゾーム) の側面の両面を描き出すことが必要なのだろう。

<参考文献>

- アンダーソン, B. (2007). 『定本 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』(白石隆・白石さや・訳). 書房工房早山. [原著: Anderson, B. (2006). *Imagined Communities Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. (1991) Revised and Expanded edition. London: Verso].
- ホブズボウム, E.・レンジャー, T. (1992). 『創られた伝統』(前川啓治・梶原景昭・他訳). 紀伊国屋書店. [原著: Hobsbawm, E., & Ranger, T. (1983). *The Invention of Tradition*. London: the Press of the University of Cambridge].

※この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 該当なし

② 該当なし

③ 該当なし

④ 2016年度 立教大学異文化コミュニケーション研究科 修士論文提出